

舟橋未来ブリッジ 第1回会議 議事録

【会議名】 舟橋未来ブリッジ 第1回会議

【日時】 2026年9月7日（月）17:00～18:45

【場所】 北日本新聞社 本社会議室（富山市安住町 2-14）

【出席者】

- ・ 渡辺 光（特別委員／舟橋村長）
- ・ 岡田 弘毅（委員／株式会社ブリベンチャー 代表取締役）
- ・ 中川 めぐみ（委員／株式会社ウオー 代表取締役）
- ・ 大石 和（委員／農業 PR プランナー）
- ・ 中林 華穂（委員／富山大学経済学部 1 年・ナカバヤシまちづくりラボ代表）
- ・ 本間浩司（舟橋村総務課長）
- ・ 堀井（事務局兼司会／北日本新聞社未来創造室）
- ・ 柵（事務局／北日本新聞社未来創造室）

開会・趣旨説明（堀井）

堀井: 皆さん、本日もお集まりいただきまして、ありがとうございます。ただいまより「舟橋未来ブリッジ」第1回会議を開始したいと思います。進行を務めさせていただきます、北日本新聞社 未来創造室の堀井でございます。よろしくお願いいたします。

一同: お願いします。

堀井: まず、村長よりご挨拶をお願いできればと思います。

渡辺村長: 改めまして、皆さんご苦労さまでございます。今回、北日本新聞社にお力添えをいただき、このような座組みで「舟橋未来ブリッジ」という、村の課題である新産業の創出に向けた機会を設けていただきました。私自身、決して堅苦しい話を求めているわけではありません。こうした柔らかな雰囲気ですまざまなアイデアを出し合う中で、何か良いものを見いだせたらと思っています。第1回ということもありますので、楽しい雰囲気で、雑談も交えながら進めてよいと考えています。まずは皆さんとそうした時間を過ごし、今後のより大きな成果に向けたキックオフになればと思っています。皆さん、どうぞよろしくお願いいたします。

一同: よろしくお願いします。（拍手）

堀井: 後ほど自己紹介の時間も設けます。まず、今回の事業の全体像と到達目標を説明します。目的は、新たな産業創出に向けた事業計画を策定することです。本年度は、「何をするか」だけでなく「誰が担うか」まで明確にすることを目標とします。担い手は委員自身でも、村外から招く人材でも構いません。単なる施設整備ではなく、舟

橋村が現在持つ資産を生かし、住民と共創する持続可能なモデルづくりを目指します。農業や越中舟橋駅の空きスペースを活用した具体的な取組などを始動させたいと考えています。12月までに事業計画を策定し、提案だけで終わらず、新年度の村の事業として小規模でも実装を始められる状態を目指します。途中段階の実証事業に使える少額の予算も用意しています。

～舟橋村発行の村紹介マップを使った村のスポットなどの紹介～

堀井:日本一小さな村という自治体であることと、富山県内で唯一人口が増えているのが舟橋村であるというところがあるので、そういう場所であることをぜひ前提に話していけたらと思います。面積はこれだけ小さい。新庄とか藤ノ木とか、富山市で言うとか区みたいな感じだが、自治体としては非常に密度が濃い場所になるんじゃないかなと思っています。

自己紹介および初期アイデア出し

堀井:では、ぜひ皆さんの自己紹介を。この間オンラインで事前顔合わせを行いましたけれども、改めてお名前と所属、やっていること。あとせっかくなので思いついたアイデアなどがあれば、岡田さんからお願いします。

岡田:改めまして、岡田です。よろしくお願いいたします。氷見市に活動拠点を置いているのですが、私自身は出身が広島県呉市でして、7年前に富山に移住して富山を楽しんでおります。今日は移住者目線でもお話ができたかなと思って会議に参加させてもらっています。今、私自身がやっているのは地域商社というところで活動してまして、先日舟橋村さんで地域商社を作るという記事があったので、すごい関心を今持っているところです。思いついたアイデアに関しては、やっぱり「日本一小さな村」っていうところをうまく活用しつつ、地域の強みを生かした取り組みができたらいいなと思っています。本当に羨ましい話ですけど、人口が増えていると。氷見市をはじめとした過疎化が進む他地域と比較して、この状況は、僕らからするとめちゃくちゃ強みのある状況と思っていて。子育て世代とかに響く魅力がきっとあるはずだというふうに思います。そこをうまく活用できたらっていうことと、基幹産業が農業という話もあるので、いかにそこでうまく掛け合わせて事業にできたらいいというふうに思っております。本日はよろしくお願いいたします。（拍手）

堀井:大石さん。

大石:改めまして、大石です。よろしくお願いいたします。何をしているのかはこの前のオンラインで少しお話したので、これまでの舟橋村との関わりをお話できればと思います。先ほど堀井さんにおっしゃっていただいた「fork toyama」を運営する会社

にいたので、ガッツリ子どもたちと遊んだりしていました。ちょうどそのタイミングで私も村に住んで、今は富山市と行き来している2拠点生活といったところです。お仕事では「dadada」さんは僕が「F35」という35歳以下の農家団体をやっているの、そのコラボレーションをよくやらせていただいています。マルシェや農家さんの料理を出してもらい、農家が自ら説明する場を作らせてもらっています。あとはですね、最近は農業者、この村に入ってくれる新規農業者を増やそうということで、立山、上市、滑川、舟橋の4市町村と組んでマッチングツアーをしています。バスツアーをやらせていただいております、自治体から受託する形で、大石が企画を作る、という感じです。富山市に住んでいる人が、舟橋村が近いから就農したいっていう方もいます。なので、特産品ありますけど、ちゃんと農業で売り上げていくっていう文脈もいいのかと思ってワクワクしております。以上です。（拍手）

堀井: 中林さん。

中林: 富山大学1年の中林華穂です。やっていることは前回お話ししたので、自分も舟橋村とどれぐらい関わりがあるのかなって考えたときに、自分ずっとサッカーをしていて、「高平メモリアル常願寺スポーツパーク」によく行っていたなと思い出しました。今回は学生という視点で関わっていけたらなと思っていて、それこそ子育て支援や、若い力で農業にどうアタックしていくかを、今までの経験を生かし、さらに学びながら参加させていただきたいと思います。よろしくお願いします。（拍手）

堀井: 中川さん。

中川: 改めまして、ウオーの中川めぐみです。よろしくお願いします。前回言ったことと少し重複するのですが、やっぱり日本一っていう名前が付けられるとこってなかなかない。しかも無理やりな日本一じゃなくて、「日本一小さな村」という自他共に認める事実があるので、「日本一〇〇シリーズ」みたいなことはやれたら面白いんじゃないかなというのの一つあります。自分が元々は東京で広報やPRをしていたのですが、そうした感覚でも強い武器になると思います。もう一つは、海がない村になるので、あえて漁師さんに来ていただく、もしくは舟橋村の子どもたちを海に連れていくといった、学びの設計ができれば面白いのかなとは思っております。以上です。（拍手）

舟橋村の現状・課題と先行事例の共有（堀井）

堀井: ちょっと先に行ってしまいましたけども、現状の課題的なものと、ここから事例的なものをざざっと頭出しみたいな感じで、頭のインプットとして最初にさせていただきます。舟橋村も将来的には人口減、2070年には日本全体がそうですけど、母数が少ないってこともあるので人口減は避けられない。そして一番あるのが、村だけで完結することはほとんどなくて、やはりベッドタウンなのです。舟橋村は通勤通学で

多くの村民が村にいない一方、村に愛着はある。けれども、村で楽しめるものがないという意見が多くなっています。日本一小さな村だからこそその資源の少なさもあるので、まずは村の資源を整理する必要があります。村では、村長へ提案する権利を販売したり、銭湯への一生入浴券（月1回）や駅メロの制作権を販売したりしています。第2弾は国民的ミュージシャンに賛同していただき、大きなニュースになりました。また、コンパクトであることから、その機動力も最大限活用できるのではないかと思います。先行事例として、富山県朝日町の「ノッカル」という事業で、公共交通機関が少ないところで住民同士が移動を支え合う取り組み。埼玉県宮代町では、農業を通じて市外から人を呼び込む仕組みもあります。例えば、村の今あるものとして、オレンジパークという公園、越中舟橋駅、駅南駐車場です。駅南駐車場は平日、パークアンドライドで富山市などへ通う人が使っていますけど、土日は空いており、その活用が課題です。オレンジパークという公園もありますので、ここが場所としてあります。また、農業という産業があります。越中舟橋駅の右側には村立図書館がありますが、左側はかつて飲食店でしたが、現在は空きスペースになっていてキッチンもあります。村が農産物加工施設を整備する話もあるので、運営者である地域商社との連携も考えられます。

ディスカッション：アイデアと課題の深掘り

岡田: 課題ってチャンスの裏返しだと思っています。将来の人口見通しを見ても舟橋村の減少幅は他自治体に比べても小さいです。また、村外に通勤通学する人がめちゃくちゃ多いって話があるんですけど、逆に言うと富山市から通いやすいよねっていうことになります。これは、めちゃくちゃチャンスだなというふうに思いました。楽しめる場所がないって話もありましたが、場所はあるんですね。その場所に行く理由がないってというのが多分問題で、楽しめることを作っていく、興すってことをやっていけば、今の施設も空間が楽しくなるんですよ。子育て世代とかに関心を持たれそうだなと思います。

堀井: ベッドタウンですよ。

岡田: よくあるベッドタウンってそんなに自然豊かじゃない。作られた街みたいなイメージがありますが、舟橋はそうじゃない。バランスがいいと思います。

大石: 農業も盛んで、っていうのもまさにそうです。例えば、これ（机上に置いた農事組合法人東和の防災缶詰）です。中身が優秀でびっくりしました。余計なもの全然入ってなくて。このクオリティを普通に作れる人がいればいいなと。まさに地域商社なんですけど、すごく良いと思います。東和さんはお米がメインですけど、育苗ハウスでシャインマスカットの栽培も手掛けておられます。今ちょうどポストインでぶどう直売の案内とかが村に入っています。「fork」でヨガワークショップをやったこと

があって、それこそ富山市藤ノ木エリアのお母さんたちはすごく喜んで来られます。近いからこそ、そこから呼び込むのはいいと思います。

堀井: 子育てに良いイメージがありますね。

渡辺: 子育て支援センター「ぶらんこ」も、7割くらいの方が村外の方です。まさに藤の木、新庄エリアの方にも利用いただいています。支援センターに特化した話で言うと、運営している NPO のスタッフの皆さんの人がいいから来てくれるのかなと感じています。なんとなく「子育て手厚いよね」というイメージを生み出して、「だったら、子ども育てるなら舟橋村がいいよね」みたいな点が、人口の移住促進の 1 つの要素になっているのではないかと思います。

堀井: 一方で、子育てばかりを推しすぎると、他の世代が「じゃあ私たち関係ない」となる恐れもあります。

中林: 若い方が農業をしておられると思うんですけど、学生が農業っていう事例を自分はまだ聞いたことがないので、学生と農業を結びつけられたら面白いと思います。例えば、自ら育てた農産物が自分の親の元に届く、とかいう仕組みができれば面白い。

大石: 舟橋村では中学校の卒業時に一度村を出るんですよね。高校生、大学生が村にいるイメージがありません。

中川: 県外から来た大学生たちとお話していると、富山の魅力を体験し切れていない学生が多いと言います。ある学生がたまたま知り合った農家さんのところに収穫体験に行ったら「めちゃくちゃ楽しくて、初めて富山に来たって思いました」と言っていました。舟橋村が率先して「うちが受け入れます」とか、もしかしたらありなのかなって直感的に思いました。

中川: 改めて今回の目的を確認したい。住民の方がどうなりたいのか、観光客を呼びたいのか、事業を育てたいのか。

渡辺: 何か事業を生み出し、そして根付かせたいというのが一番強い。自走できるような組織を作る。その過程で地域の学生さんのコミットをいただけてもいいのかなと思っている。ベッドタウンあるあるなのかは分からないが、村の中の出来事や取り組みは、「参加」までは皆さんしてくれるが、「参画」まではハードルが高い。事業を作っていく過程で「私もやってみようかな」という村の人が育ってくれてもいいかなと感じています。

本間: 事務局から補足をしますと、舟橋村は日本で一番小さいがゆえにコンビニエンスストアやドラッグストアはありますが、多くの皆さんは村外的大型店舗で買い物をされる。なかなか村の税収につながらないという中で、アイデア勝負でお金を稼いでいるところもあります。特産品みたいなものを作り、産業を興し、村で事業を興して村の収入にもつなげていきたい。短期的に言うと、今年 3 月に総合計画の後期版を

作りまして、特産品を作って売上を 1000 万、2000 万と上げていきたいという 5 年後の姿を想像しています。

中川: 直売所はありますか？

本間: サッカー場に併設するカフェの中では、一部直売できるエリアがあり、農産品以外のものもありますが、運営事業者さんがおられます。

大石: スポーツパークのところですね。

中川: 村外からの利用が多い子育て支援センターにお金が落ちる仕組みはありますか。

本間: 基本的に利益を生まないような法人方式でやっています。

中川: 子育て世代が多く来ているならば、子どもを預けながら直売所で買い物したりできないですかね。スーパーに行くのもいいですが、生産者の顔が見える直売所で購入したいという層もいます。また、キッチンカーなどでドリンクやスイーツを販売するのも良い。親御さんの癒やしや楽しみにもつながると思います。

岡田: 石川県のかほく市にある「かほっくる」という施設は、結構大きな室内遊び場があって、市外からは有料で入れます。カフェ併設で、働きながら子どもを預けられるコワーキングスペースみたいなものも用意しており、似たようなことが近くでできるのであれば、これは、めちゃくちゃ良いと思います。

中川: 子育て支援センターも土日有料にして開館するとか。子どもを遊ばせるっていう休日だからこそ特別な感覚で来ることになれば、村の収入にもつながりそうです。

大石: 子育て支援センターに隣接する舟橋会館は土日に何か使われていますか？

本間: 空きがあれば、申請の上で利用できます。昼の大広間や調理室もあります。土曜

日にも地域活動などで利用されています。お風呂の利用料金は 450 円です。

中川: 調理室があるなら、特産品を使って親子でクッキングとか何でも使えますね。

大石: 食育ですね。

堀井: 話を戻しますが、就農ツアーはどういう人が来ていたのでしょうか？

大石: 高校生から 50 代まで。20 代、30 代、40 代も含め、まんべんなく参加者がいました。

岡田: 舟橋村には、東和さん以外にも大きな農家さんはいらっしゃるんですか？

大石: 「アライブ 21」という事業者さんなど複数いらっしゃいます。

本間: 集約は進んでいます。

大石: 「みんなが自分の田んぼを 1 枚持つ」みたいなのは、かなりハードルが高いですけど、面白いかもしれない。

中川: 年1回、村のお米を予約して収穫体験がついてくるとか。

岡田: 農業ってハードルが高いんですよね。食育とか体験に関心があっても、どこに声をかけていいかわからない。誰に声をかけたら良いかを見える化をしてあげる。地域の農業指導者や農業の達人（ベテラン）から教えてもらうとか、そういった仕組みがあっても良い。

大石: あとは、「どろんこ農園」という屋号でやってらっしゃる方もいますね。

岡田: ぜひ、フェスもやりたいですよね、例えば「どろんこフェス」。長野県信濃町に事例があります。

中川: 田植え体験と収穫体験は人気が高いですね。

岡田: 農業体験したい人と農家さんとを繋ぐプログラム化ができればいい。

ホワイトボードへの整理・まとめ

中川: 「実際に事業化しましょう」という実行部隊として、早いタイミングで村民の方にも入ってもらった方がいいのかなと。

堀井: 枠組みが見えてきた中で、「一緒にやらない？」と呼びかけて増やしていくのもありだと思います。今回のゴールである誰がやるかというところで。

堀井: 舟橋村の資産は何か、誰がやるのか。ターゲットが誰か。次回に向けて、今日の議論を踏まえて「私だったらこれがいいのではないか」という具体的な新事業計画の提案をそれぞれ持ち寄る形にしましょうか。

本間: 公共施設の有効活用や行政視察の有料パッケージ化による財源確保という課題もお伝えしておきます。それらに対するご提案もいただければと思います。

中川: 有料化すべきだと思います。私も県外に視察に伺うことは多いですが、視察代の他に、宿泊施設や食事、体験などにしっかりお金をお支払いすることが多いです。

岡田: 視察受け入れパッケージを作って、食事やお土産までコーディネートすればいいのではないのでしょうか。「fork toyama」が視察の運営に関わって、事業運営の財源の一つにするなども良いかもしれないですね。

堀井: それでは次回日程ですが、10月下旬あたりで調整しましょう。本日はありがとうございました。